

中国語母語話者の日本語の 意見文に用いられる文末表現

—日本語話者・中国語話者の日本語
意見文及び中国語意見文を比較して—

野 崎 ま り・岩 崎 裕久美

大学日语指导的一个重要目标是让留学生掌握好学术性报告和论文的写作方法。其中我们关注“客观表达”的重要性。通过对中国人学习者(CN)作成的意见文与日本人(JP)作成的意见文对照,分析研究,可以知道在CN作文中存在有以下三种倾向。

- ① CN在表达意见时经常使用思考动词「思う」。因为「思う」是主观性动词,所以它削弱了文章的客观性。学术性论文需要客观性,所以有必要指导CN尽量避免使用「思う」,而多使用具有客观性的被动型词语(例如「考えられる」「思われる」等)。
- ② CN在句尾表达中,「だろう」的使用显得特别困难。这是因为「だろう」的语义多,而且汉语当中没有与之完全一致的词语。同时CN在学习过程中可能没有学习过作为表达意见方式的「だろう」。
- ③ 对于疑问句,CN和JP都使用得比较多。但是CN对「だろうか疑問文」的使用难以掌握。所以导致「提出问题句」和「主张意见句」混用的情况较多。

上述CN在日文写作中的错误倾向可以作为今后教学的重要参考。

キーワード：客観的文章, 意見文, 文末モダリティ, 主張動詞, だろうか疑問文

1. はじめに

大学の授業において, 学術的な文章が書けることは大きな目標であり, 留学生対象の「作文」の授業のなかでそれが指導されている。二通(1996)

は、大学の教員を対象にレポートに関するアンケートを行い、そこでもレポートは大学での評価に重要な役割を担っていることを示している。二通のアンケートで集約された教員の意見には、客観的・論理的な文章を書くことの重要性を述べているものがあり、留学生対象の日本語作文の授業においても、こうしたことに着目した指導の重要性をうかがわせる。また、木戸（2007）は作文における客観的表現とは、①特定の言語形式の「事実の報告」と「意見」の中の出現位置②文末表現③書き手を表す表現により特徴づけられるものであるとしている。

本稿では、木戸が挙げている3つの特徴の中でも、②の文末表現に着目する。そして、日本語母語話者（JP）と中国人日本語学習者（CN）の文末表現の使用実態の差異を明らかにすることで、基準となるJPの作文に近づくための指導の一助としたい。

2. 先行研究

ここでは、学習者の作文の客観的表現と文末表現に関する先行研究を概観することで、本研究で検討すべき問題を明確にする。

前章でも触れたが木戸（2007）は、大学での学術活動のための作文授業を受講した上級日本語学習者の作文28例を分析することで客観的表現の特徴を明らかにしている。木戸は、作文における「客観的表現」を「表現の上で、客観を装う」ことであり①特定の言語形式の「事実の報告」と「意見」の中の出現位置②文末表現③書き手を表す表現により特徴づけられるものであるとしている。木戸が挙げた特徴のうち文末表現には、さまざまな表現が内包されているが、その中でもモダリティは日本語学習者にとって学習困難な項目であり、その習得について多くの研究がなされている。

大島（1993）はCNは学習段階が進んでも、韓国語母語話者と異なりモダリティの選択において日本人の選択に近づく傾向が弱いとして、中国語母語話者のモダリティ習得の困難さを述べている。また佐々木・川口（1994）では、留学生の書いた文章の語調の強さへの違和感の原因を、文末を命題で終わらせることであり、モダリティの使用が日本人の小学校5、6年生程度であると述べている。

伊集院・高橋（2004, 2006, 2010, 2012）は、主張のある文の文末表現とその構造的特徴について、日本語母語話者と中国語母語話者と韓国語母語話者の作文を比較検討した一連の研究を行っている。伊集院・高橋

(2004) では、Writer/Reader visibility (談話参加者の存在の明示度) の観点から、中国人学習者と日本語母語話者の作文コーパスを分析し、中国人学習者は日本語母語話者よりも、読み手に強く働きかける文末表現を使うことを明らかにしている。また、それに続く高橋・伊集院 (2006) では疑問文について分析し、中国人学習者が日本語母語話者よりも、読み手に強く働きかける疑問文を多く使用していることを示している。伊集院・高橋 (2010) では、前述の研究を踏襲した上で、韓国語母語話者の作文も分析対象とし、その文末モダリティの使用傾向を比較している。ここでも、伊集院・高橋 (2004) と同様に、中国語母語話者は相手に積極的に働きかけ共感を得ることを重視していると述べている。さらに、伊集院・高橋 (2012) では、文章構造と文末表現 (思考動詞・モダリティ・立場表明) の出現位置の関連を分析し、日本語母語話者は多様な文末表現を効果的に使用していること、中国人学習者は「思う系」の思考動詞の使用が顕著であることを明らかにした。

このように、日本語母語話者と中国人学習者の文末表現の使用実態は異なっていること、そして、その差異は母語である中国語の影響が示唆されているものの、具体的に中国語との対照からその干渉について検討したものは、管見の限り見当たらない。本稿では、日本語母語話者 (JP) と中国人学習者 (CN) の日本語作文および中国語作文を比較することで、効果的な作文指導を考案することを目指す。

3. 研究目的・研究課題

学習者の文末表現に関する研究を概観する中で、中国人学習者の文末表現が日本人の文末表現と異なること、その一因に母語の影響が可能性として挙げられることが明らかになった。そのため、本稿ではこれらの研究を受け、中国語で書かれた作文を日本語の作文と合わせて検討することで、その影響を明らかにすることを目的とする。

文末表現は多岐にわたるが、本研究ではその中でも、伊集院・高橋 (2012) で明らかになった筆者の主張を表す文の末尾に顕著に出現したものに絞って検討することにした。そのため、「思う系 (例: 思う/思われる/思える)」「考える系 (例: 考える/考えられる/考えられている)」の思考動詞と「賛成だ/支持する/反対だ」といった立場表明、推量を表すモダリティ「だろう」、疑問文の3項目について考察する。なお、伊集院・高橋

(2012)で思考動詞とされていたものを、本稿では「主張動詞」と表現する。「主張動詞」については次章を参照されたい。

上記の研究目的をふまえ、以下の3つの研究課題について検討する。

- RQ 1 主張のある文の文末表現において、日本語母語話者（以下、JP）と中国人日本語学習者（以下、CN）の主張動詞と立場表明にはどのような使用傾向があるか。
- RQ 2 主張のある文の文末表現において、JPとCNは、文末モダリティ「だろう」をどのように使っているか。
- RQ 3 主張のある文の文末表現において、JPとCNは、疑問文をどのように使っているか。

4. 本研究の立場

伊集院・高橋（2012）では、主張ある文の文末の言語形式を文末モダリティ、思考動詞（思う系、考える系）、立場表明に分類している。本研究では、その分類を踏襲しつつ、本研究で収集したデータに密着してさらにいくつかの要素を追加・修正し、以下のように分類することとした。

4.1 主張動詞と立場表明

伊集院・高橋（2012）では、主張ある文末の言語形式で使用されている言語形式のうちモダリティ以外を、思考動詞（思う系、考える系）、立場表明（賛成する、立場をとるなど）に分類している。しかし、木戸（2007）では思考動詞以外に、「言える」も話し手が自分で構成した主張に対して客観的妥当性を付与する機能があるとしていることから、本研究ではそれらを含めて、主張ある文の文末表現で出現している動詞を主張動詞とした。なお、立場表明は、伊集院・高橋（2012）の分類を踏襲する。

木戸（2007）は、「客観性をもたせること’あるいは‘実証的であること’」の重要性を説き、「事実の表現のために文章を受身形で書くことの重要性」について指摘している。そのため本研究では、主張動詞の受身形まで細分化して分類することとした。

以下に示すのは、本研究で扱う主張動詞と立場表明である。

表1 本研究が扱う主張動詞と立場表明

主張動詞				立場表明
思う	考える	言える	見られる	賛成だ 反対だ
思える	考えている	言われている	感じる	
思われる	考えられる	言えよう		
思われている	考えられている			

4.2 モダリティ

本研究では、日本記述文法研究会編（2003）によるモダリティの分類を踏襲する。日本記述文法研究会（2003）は、モダリティには4つのタイプ（①文の伝達的な表し分けを表すもの②命題が表す事態のとらえ方を表すもの③文と先行文脈との関係を表すもの④聞き手に対する伝え方を表すもの）があり、その分類と言語形式は以下の表のようにまとめられる。

表2 モダリティの分類と主な言語形式

モダリティのタイプと下位分類			主な言語形式	
①	表現類型モダリティ	情報系	叙述	平叙文
			疑問	疑問文
		行為系	意志	(よ)う
			勧誘	(よ)う・ないか
			行為要求	なさい・てくれ
			感嘆	なんと～ことだろう
②	評価のモダリティ	必要	べきだ・なくてはいけない	
		許可・許容	てもいい	
		不必要	なくてもいい	
		不許可・非許容	てはいけない	
	認識のモダリティ	断定	断定形	
		推量	だろう	
		蓋然性	かもしれない・ちがいない	

		証拠性	観察・推定	ようだ・らしい・(し) そうです
			伝聞	(する) そうだ
③	説明のモダリティ			のだ・わけだ
④	伝達のモダリティ	丁寧さのモダリティ		普通体・丁寧体
		伝達態度のモダリティ		よ・ね・よね

(日本記述文法研究会, 2003 より作成)

本研究では、これらの文末モダリティのうち研究課題に照らし合わせ、表現類型モダリティの疑問と、認識のモダリティの推量（表中のグレーの部分）について検討する。

5. 研究方法

5.1 調査協力者および分析データ概要

本研究は、日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文を対象に分析し、その文末表現を比較検討する事を目的としている。そのため、某大学に通う中国人日本語学習者20名を対象に意見文の執筆を依頼した。日本語レベルはそれぞれ、日本語能力試験1級(N1) 9名, 2級(N2) 11名であった。また、比較対象となる日本語母語話者の作文は、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(2011年3月伊集院)¹の日本語母語話者の作文134篇より20篇をランダムサンプリングし、使用した。執筆者情報は以下の表3の通りである。

表3 執筆者情報

執筆者	人数	性別	平均年齢	日本語レベル
日本語母語話者 (JP)	20名	男性10名 女性10名	20.9歳	/
中国人学習者 (CN)	20名	男性10名 女性10名	23.1歳	

本研究の分析データの概要は、表4の通りである。

表4 分析データ概要

執筆者	作文数	タイトル数	本文数	収集時期
日本語母語話者 (JP)	20	20	351	2007年6月～11月
中国人学習者 (CN)	20	20	319	2013年7月

5.2 データ収集方法

本研究は、比較対象である日本語学習者の作文は、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(2011年3月伊集院)日本語母語話者の作文134篇より20篇をランダムサンプリングし使用したため、中国人学習者も同条件でデータを収集した。

執筆者には、次に示す課題文を読み、辞書等は使用せずに原稿用紙600～800字程度で執筆してもらった。日本語で執筆した後で、同じ内容の意見文を母語でも執筆するようにした。作文の質を保証するため、調査者監督下の元、制限時間は特に設けず協力者のペースで執筆を依頼したが、おおよそ30分から1時間の範囲内で書き上がった。

【課題文】

下の文を読んで、自分の意見を600字から800字ぐらいの日本語で書いてください。それから、同じ文を中国語で書いてください。

今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

5.3 分析方法

上記の方法で収集したデータを原文のままエクセルファイルに入力した。誤字脱字についても、原文の通りに入力した。執筆者のプライバシーを保護するために、作文に書かれている執筆者が特定できるような情報はアルファベットに置き換えるなどして修正を加えた。日本語作文データは筆者がエクセルファイルに各セルに一文ずつ入力し、原文に従って段落の

はじめとおわりをコーディングした。対訳の中国語は、文数が日本語と一致しなかったため、分析者が内容から日本語に対応する中国語の部分と同じ行に入力した。データベース完成後、分析者2名で文末に主張動詞およびモダリティが出現しているものをコーディングした。コーディングが一致しない箇所は全て協議し、共有した上で分類した。その後、対訳中国語の作文から、抽出した日本語の文末モダリティおよび主張動詞に対応している語を抽出した。なお、対応語がないものには「なし」とコーディングした。また、日本人母語話者のデータについても、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(2011年3月伊集院)から20篇をランダムサンプリングし、同様の処理を施した。

コーディング終了後、主張動詞およびモダリティの使用傾向を示すために、出現数と割合を算出し、JPとCNの使用傾向に有意差があるかをみるため、独立性の検定 (χ^2 検定) を行った。

6. 結果と考察

6.1 主張動詞と立場表明

6.1.1 主張動詞と立場表明の使用傾向

JPとCNの文末表現のうち、主張動詞と立場表明の出現数及び割合は以下の表のようになった。

表5 日本語母語話者と中国人日本語学習者の主張動詞と立場表明の出現状況

出現形式		日本語母語話者 (JP)		中国人学習者 (CN)	
		出現数	%	出現数	%
主張動詞	思う	26	35.14	36	63.16
	思える	2	2.70	0	0.00
	思われる	3	4.05	4	7.02
	思われている	0	0.00	1	1.75
	考える	22	29.73	0	0.00
	考えている	1	1.35	1	1.75
	考えられる	4	5.41	0	0.00

	考えられている	0	0.00	3	5.26
	言える	8	10.81	3	5.26
	言われている	1	1.35	0	0.00
	言えよう	0	0.00	1	1.75
	見られる	0	0.00	2	3.51
	感じる	4	5.41	2	3.51
立場表明	賛成だ・反対だ	3	4.05	4	7.02
合計		74	100.00	57	100.00

χ^2 検定の結果、両者には0.1%水準で関連がみられなかった ($\chi^2(1)=5.14, p > .001$)。このことから、JPとCNの主張動詞・立場表明の使用に関しては、今回の標本数で検出できる差は認められなかった。

次に、特に使用例が多い「思う」と「考える」についてみる。JPとCNの「思う」の出現数について χ^2 検定をした結果、両者には0.1%水準で関連がみられた ($\chi^2(1)=10.14, p < .001$)。ここから、「思う」の出現数はCNの方が多いいえる。一方、「考える」についても同様に χ^2 検定をした結果、両者には0.1%水準で関連がみられた ($\chi^2(1)=20.36, p < .001$)。そのため、「考える」はJPの使用量は有意に多いことがわかる。以上のことから、JPは多様な主張動詞を使うのに対して、CNは「思う」のみ多用しており、「考える」など他の主張動詞をあまり使用していないことが考えられる。

次に日本語の主張動詞・立場表明に対応する中国語では何を使用しているかをみてみる。以下に示すのは、CNの日本語作文に出現した主張動詞・立場表明とそれに対応する中国語をまとめたものである。

表6 CNの日本語作文に出現した主張動詞・立場表明とそれに対応する中国語

主張動詞と立場表明に対応している中国語	日本語の主張動詞と各出現数	出現数 合計	%
相当語なし	思う (19), 思われる (3), 見られる (1), 考えられている (2), 言える (1),	27	47.3
认为	思う (8), 思われる (1), 考えている (1), 考えられている (1)	11	19.3
觉得, 感觉	思う (4), 感じる (1), 感じがある (1)	6	10.5
可以说, 能说	言える (2)	2	3.5
可以看到	見られる (1)	1	1.8
可称为	言えよう (1)	1	1.8
想	思う (1)	1	1.8
应该	思う (1)	1	1.8
赞成, 认同	賛成だ (3)	3	5.2
我的意见是, 我的观点是, 在我看来, 就我说我呢	思う (3), 賛成だ (1)	4	7.0
合計		57	100

この結果から言えることは、CNは日本語作文では主張動詞を使っているが、中国語では相当語を使わず断定的な言い方になっている文が約半数を占めていることである。次項では、「中国語の相当語なし」が特に多く使用されていた主張動詞「思う」について検討する。

6.1.2 主張動詞「思う」

ここでは、「中国語の相当語なし」が特に多かった主張動詞「思う」について、具体的な使用例を挙げながら考える。まず、使用例が少ないものの中国語の相当語が存在した例を以下に挙げる。

CN5-3 ですから、私はもう新聞や雑誌はいらないと思う。

所以，我认为如今是该舍弃报纸的时候了。

CN16-1 まづ、自分は、これからも、新聞や雑誌は必要だと思います。

首先，我自己觉得以后还是需要报纸和杂志的。

(下線は筆者が加筆)

これらの例は中国語では、主語である「我(私)」と動詞「认为, 觉得(思うに相当)」を使って、主観的に意見を述べている。対応する日本語においても、主語である「私」と主張動詞「思う」を使うことで、その表現は主観的意見表明となっている。

次に、主張動詞「思う」に対応する中国語がなかった例を見る。以下の例はすべて一人の協力者の作文で見られたものである。

CN7-14 現在の技術ではまだ全世界の範囲でインターネットを使えることができません。

以现在的技术并不能达到全世界范围的使用。

CN7-15 この面では新聞や雑誌などの情報媒体はまだ必要だと思います。

从这一点来说，报纸，杂志之类的信息媒介是需要。

CN7-16 もう一つはインターネット上の情報は消しやすいので、長期的な保存はできないと思います。

再看，网络上的信息是很容易消除的。很难长期保存。

CN7-17 歴史資料としての重要な記事など長期的な保存にはやはり紙の形で保存しやすいと思います。

作为历史资料的重要报道之类的文章来说，还是纸制版本易于保存。

CN7-18 つまり、流通性を持っているインターネットと保存性を持っている書籍とはそれぞれ長所があるので、互いに代わることはできません。

总所言之，具有流通性的网络和具有保存性的书籍，各自有各自的优点，不能够相互取代。

CN7-19 これからも、新聞や雑誌は必要だと思います。

今后，报纸，杂志也还是需要的。

上記の例では、「思う」を連続使用しているが、中国語には相当語がない。佐々木・川口(1994)では、「思う」を連続して使用するの、内容が貧困になり、幼い印象を与えるといっている。また、木戸(2007)は「思う」を使うと客観的表現としての意見の度合いが低くなるといっている。そのため、上記の例は、学術的文章にはそぐわないと言えよう。

小川(1990)は、事実や客観性の強い発言では、中国語においても主語が省略されるとしている。CN7の文15, 16, 17, 19の中国語では、主語を省略することで、客観的に意見を述べており、主語がないことで対応する主張を表す表現も出現していないと考えられる。つまり、CN7は中国語では、客観的に意見を述べているにもかかわらず、日本語では文末に「思う」をつけたことによって、客観的表現としての意見の度合いを低めてしまったといえる。このため、両言語の文章には主客性に乖離がみられる。

6.1.3 主張動詞「考える」

3.1.1で明らかにしたように、CNは主張動詞「考える」を使用していない。しかし、「考える」の活用形である「考えている」「考えられている」は使用していた。以下では、これらの使用例を質的に分析する。

CN14-13新聞なら、面白いニュースでも、政治とかに関わる物で、知識とかにいい事だと考えられている。

报纸的话，有趣的新闻也是关于政治等的事情，也会长见识。

CN14-13の日本語文「考えられている」は「考えられる」を誤用したものと推察される。CN14-13の中国語は、主語である「我(私)」と「认为(考える)」が省略されており、客観的に主張を表現している例である。これに対応する日本語では動詞「考える」の受身形「考えられる」を使い客観的に表現しようとしているが、語末にさらに「テイル」を追加することで、自己の主張ではなく、一般的に考えられていることを示す表現となっている。このようにCN14は「考える」の活用形を間違って使用しており、同様の誤用がCNの中に散見された。

6.1.4 提案できる指導案

前項でも検討したように、CNの作文は母語と日本語を比較した際、両

言語の主客性の乖離が多く見られた。ここでは、母語と日本語の主客性の乖離の解消のための指導法について検討してみたい。

森田 (1989) は、「考える」は客観的、「思う」は主観的な意見陳述に使う動詞だといっている。また森山 (1995) では、「思う」などの思考動詞が受け身形になる事で、命題の判断主体を消した表現になり、客観的になることを指摘している。さらに、木戸 (2007) は、「言える」はレポートで意見を述べる際、客観的表現として使って欲しい言語形式であると述べている。また、二通・大島ら (2009) でも、客観性を重んじる論文において「考える・考えられる・思われる」等の表現を使うよう指導している。

これらのことから、中国語で客観的に意見を述べている文に対応する日本語では、「思う」の受け身形「思われる」や「考える／考えられる」「言える」の使用を指導することで、日本語においても客観的に意見を表現する事ができるのではないだろうか。

6.2 文末モダリティ「だろう」

本研究で収集したCNの日本語作文では文末モダリティ「だろう」の使用例はわずか4例であった。日本語学習者が「だろう」が使えないのは、佐々木・川口 (1994)、伊集院・高橋 (2012) でも指摘されており、今回の結果はそれと一致するものとなった。

森山 (1995) は、「思う」と「だろう」には「不確実表示用法」という共通の機能があると指摘している。そのため、断定を回避するために出現した「思う」と「だろう」は基本的に置き換えが可能であるとしている。

以下にあげるのは、JPに見られた断定を回避するために使用された「思う」と「だろう」である。

(例)

JP10-5 新聞や雑誌を買ってもすべての記事を読む人は少ないだろう。

：

JP10-9 しかしながら、インターネットにはいくつかの問題点があると思う。

：

JP10-13 そのため「もう新聞や雑誌は全く不必要だ！」というわけにはいかないと思う。

JP10-5, 9, 13の「だろう」と「思う」は入れ替え可能だが、母語話者の場合語末と同じにすることを避けるため、両者を自然に使い分けられていると考えることができる。

ここで、本研究のCNの「だろう」の使用例が少なかったことに立ち返ってみると、CNは断定を回避するために「思う」を多用し、「だろう」を使わなかったためその出現数が少なくなったものと考えられる。そのため、以下では「思う」を質的に検討したい。

次に示すのは、文末で「思う」を使用しており、「だろう」に置き換えが可能と考えられる例である。

CN3-15 だから、新聞雑誌のような手で持ってゆっくと繰り返し読むことができるようなマスコミは不可欠だと思う。

因此，像新闻杂志这样可以拿在手上慢慢品味反复阅读的非电子媒介也是不可或缺的。

CN5-9 逆にとして、インターネットでニュースを見るのが環境に対してはいいと思う。

相反，网络却不需要纸，首先它是对环境有好处的。

上記の例で使用された「思う」は断定を回避するために使われている。しかし「思う」を使うことで客観的表現の意見の度合いを低めている。対応する中国語を見ると、主語である「我」や自己の主張を表す表現（认为、觉得など）がなく、客観的に意見を述べている。これは、6.1.2でも検討した日本語と中国語の主客が乖離した例である。このような「思う」を「だろう」にするよう指導することで、日本語と中国語の主客の乖離は解消され、前節で指摘した「思う」の連続使用が避けられるのではないだろうか。

6.3 疑問文の効果的使用

6.3.1 疑問文の機能と条件

疑問文には主に〈質問〉〈疑い〉〈確認要求〉の機能が存在し、以下の2つの条件で分類される（宮崎他，2002. 日本記述文法研究会，2003）。

- ①【不確定性条件】話し手には何らかの情報が欠けているために、判断が成立していない。
- ②【問いかけ性条件】話し手は聞き手に問いかけることで、その情報を埋めようとする。

上記の2条件を満たしたものが〈質問〉であり、①の【不確定性条件】のみ満たしているものが〈疑い〉、②の【問いかけ性条件】のみ満たしているものが〈確認要求〉である。

次項からは、機能ごとにその使用実態について検討する。

6.3.2 〈質問〉の疑問文

先に述べたように、〈質問〉は【不確定性条件】と【問いかけ性条件】の両方を満たしており、話し手に何らかの情報が欠けているために聞き手に問いかけることで、その情報を埋めようとする働きである（宮崎他，2002日本記述文法研究会，2003）。

以下に示すのは、国立国語研究所対訳作文コーパスでみられたCNの文である。

（例）

以上は私の考えですが、みんなはどう思いますか？
 たばこと言ったら、みんな何と思いますか。

〈質問〉の疑問文は聞き手に情報を要求する機能があるため対話性が高いものである。しかし、本研究が対象としている意見文においては、その性質上聞き手に情報を要求する〈質問〉の使用はそぐわない。それは伊集院・高橋（2010）において、JPに〈質問〉の疑問文の使用例が見られなかったことから分かる。

伊集院・高橋（2010）では、CNは45の疑問文のうち25例がこの〈質問〉であったとされるが、本調査では、CNに〈質問〉の疑問文は使用されていなかった。この結果は学内での作文指導の成果と考えられよう。このことから、〈質問〉が意見文にそぐわない形式であることは学習しやすい項目だと推察される。

6.3.3 〈疑い〉の疑問文

〈疑い〉の疑問文は、【不確定性条件】のみを満たすもので、話し手にとって不明の点があることだけを表すものであり、聞き手に問いかける機能をもたない（文法記述学会、2003）。〈疑い〉には、「判断不明」「思考過程」「疑念」の用法があり、これらから「問題提起」の機能が派生する（宮崎他、2002）。「問題提起」の機能とは論理的文章において、筆者の考えの筋道を示すものである。

以下に挙げるのは、JPの作文にみられた「問題提起」の機能をもつ疑問文である。

（例）

JP3-3 目的とは何だろうか。

JP3-4 私は、第一に、「公正かつ公平であり、取り上げないように偏りのない」社会現象を伝達することがこれに該当すると考える。

JP18-7 大きなモニターに表示した場合はどうでしょう。

JP18-8 確かに一度に見ることのできる領域は広がりますが新聞のようにいろいろな所に持ちはこぶことはできなくなってしまいます。

JP3-3の例は、聞き手を必要とせず、これからどのような問題について検討するのか疑問文の形式で問題を提示し、それに続くJP3-4でその回答を提示している。また、JP18-7も同様に問題提起をし、JP18-8で回答している。これらはどちらも自問自答の形式で問題を提示し、その後筆者の回答（意見）を展開している。

同じような「問題提起」の機能としての疑問文はCNでも12例みられた。以下は、CNで見られた「問題提起」の使用例である。

（例）

CN6-10 それでは、インターネットさえあれば新聞や雑誌は果たして要らないことが大丈夫ではないか。

那么，只要有网路报纸和杂志真的就不需要了吗？

CN6-11 それは絶対あえない。

当然还是不可能的事。

：(CN6-12~19はCN6-11, 20の根拠)

CN6-20 このように、インターネットと新聞や雑誌を代表とする書類は
いずれも必要だと思う。

总之、网络和以报纸、杂志为代表的书籍在我们的生活和学习中
都是必不可少的。

CN20-13 どうして本屋では新聞や雑誌はまた売れている？

为什么书店里仍在卖报纸和杂志呢？

CN20-15 ものが存在するのは、絶対存在する理由があるはずだと私は今
でもそう思う。

存在即合理、我依然这么认为。

これらの例は先ほど検討したJPの問題提起と同質の疑問文である。CN6-10で問題を提起し、CN6-20で問題提起に対応する回答を述べている。また、CN20-13も問題提起をしており、CN20-15で筆者の回答を提示している。

問題提起の疑問文は、JPでは4例、CNでは12例見られた。

次に、2つの〈疑い〉の疑問文について検討する。以下の例は1人のCNの作文内で見られたものである。

(例)

CN2-3 しかし、インターネット・ニュースが、本当に新聞や雑誌の役
を立てることができるのか？

然而，网络新闻真的能发挥报纸和杂志所起的作用么？

CN2-4 筆者は疑問を抱く。

笔者持怀疑态度。

CN2-5 まず、インターネットの普及率。

首先，网络的普及率。

：(CN2-6, 7はCN2-5の具体例)

CN2-8 次、インターネット・ニュースの真実さ。

其次，网络新闻的真实性。

：(CN2-9~12はCN2-8の具体例)

CN2-13 最後、人間思想の保存。

最后，人类思想的保存。

：

CN2-19 インターネットが便利さ、早さなどの長所を持つけれども、新聞や雑誌の役割をとらないのではないだろうか。

尽管网络有便利, 迅捷等优点, 仍然不能取代新闻和杂志所起作用。

CN2-3もCN2-19も、【不確定性条件】のみを満たし聞き手を必要としていないため、〈疑い〉の疑問文に分類できる。CN2-3は先ほどまで検討してきた「問題提起」の疑問文であるが、CN2-19はCN2-3とは機能面で異なる。

意見文の性格上その構造は自問自答の形式をとり、問題提起で課題を提示し、根拠を並べ、最終的な自己の結論につなげるものである。CN2は、文章の前半部分であるCN2-3で問題提起をし、さまざまな根拠をならべ、最終的な結論を文章の最後の一文であるCN2-19で提示している。このように議論の構造の面からも、CN2-19が問題提起の文でないことは明らかだろう。よって、CN2-19は〈疑い〉の疑問文の形式をとった「主張」と考えることができる。CN2は問題のと主張の疑問文をうまく使いこなしている例である。このような「主張」の機能をとった使用例は、JPが4例、CNも4例あり量的にその使用実態に違いは見られなかった。

6.3.4 〈確認要求〉の疑問文

6.3.1で確認したように、確認要求の疑問文は疑問文の2条件のうち【問いかけ性条件】のみ満たすものである。そのため、話し手に何らかの判断が成立しているということを前提に、聞き手にその判断を問いかけ、確認を求めるという機能を持っている（宮崎他2002文法記述学会2003）。

(例)

暑かったでしょ? 冷房入れようか。

ほら、田中さんっていたじゃない。

(日本記述文法研究会, 2003)

〈確認要求〉の疑問文は、〈質問〉の疑問文同様、聞き手に情報を要求する機能があるため対話性が高い（日本記述文法研究会, 2003）。しかし、本研究が対象としている意見文においては、その性質上聞き手に情報を要求する〈確認要求〉の使用はそぐわない。それは伊集院・高橋（2010）において、JPに〈確認要求〉の疑問文の使用例が見られなかったことから

も分かる。

伊集院・高橋（2010）では、CNは45の疑問文のうち5例がこの〈確認要求〉であったとされるが、本調査では、CNに〈確認要求〉の疑問文は使用されていなかった。これは〈質問〉の疑問文同様、【問いかけ性条件】を満たした疑問文は、意見文にそぐわない形式であることを学習しているためと考えられる。

6.3.5 疑問文の指導案

今回のデータのCNの作文には、〈質問〉〈確認要求〉の疑問文が使用されておらず、疑問文の持つ【不確定性条件】と【問いかけ性条件】のうち、【問いかけ性条件】と意見文が持つ性格のかみ合わせの悪さは理解していることが明らかになった。しかし、〈疑い〉の疑問文において「問題提起」の疑問文と「主張」の疑問文を混同していると見受けられる誤用が散見された。本項では、このような誤用から指導方法について検討する。

(例)

CN 6-10 それでは、インターネットさえあれば新聞や雑誌は果たして要らないことが大丈夫のではないか。

那么，只要有网路报纸和杂志真的就不需要了吗？

CN 6-11 それは絶対あえない。

当然还是不可能的事。

：(CN6-12～19はCN6-11, 20の根拠)

CN 6-20 このように、インターネットと新聞や雑誌を代表とする書類はいずれも必要だと思う。

总之，网络和以报纸，杂志为代表的书籍在我们的生活和学习中都是必不可少的。

CN6-10は「問題提起」の文であることは、文章内での出現位置と中国語から明らかであるが、形だけに着目すると違和感がある。中国語「那么，只要有网路报纸和杂志真的就不需要了吗？」を適切な日本語に直すと、「それでは、インターネットさえあれば、新聞と雑誌は本当にいらないのだろうか」となり、形式的にも「問題提起」の形になる。このことからCN6は「だろうか」と「のではないか」を混同していることが推察される。

(例)

本当にいらないのだろうか。

本当にいらないのではないか。

上記の2文を比較した際、その意味合いが違うことがわかる。その違いとはどこにあるのだろうか。

宮崎他(2002)は、「だろうか」には、論理的なテキストを構成するうえで、これから述べる内容がどのような問題意識から出発しているかを示す働きがあると述べている。ゆえに、6.3.3で考察した「問題提起」の疑問文として使うことができる。一方、「のではないか」には、話し手が有力な仮説をすでに持っており(傾き)²、聞き手にその仮説を伝える機能があるとしている(宮崎他)。そのため、6.3.3で検討した「主張」の機能を持った疑問文として使用できるのだらう。

CN6-10の文に立ち返ると、問題提起の機能を持つ疑問文であるため「だろうか」とするのが妥当であるところを「のではないか」を使っているため、意味が通じにくい。この混同の原因の一つとして、「のではないだろうか」の存在が考えられる。「のではないだらうか」は筆者の判断の確信度合いを下げた表現であると作文教育の教材等で学習者に紹介されている。6.2で検討したように「だらう」には断定回避の機能があることから、「のではないか」に「だらう」を組み込むことで、控えめな〈主張〉を行っていると考えられる。このように「のではないだろうか」は「のではないか」と「だらう」の複合形であるため、学習者が「だろうか〈問題提起〉」と「のではないか〈主張〉」を混同してしまったのではないかと考える。

また以下の例は、裸の形式の疑問文を使っているための誤用である。裸の形式の疑問文とは、主張動詞や他のモダリティが後続しない疑問文である。

(例)

CN9-14毎日どのぐらい紙を使っている。

每天要用多少的紙?

この疑問文は、機能的に問題提起の疑問文にコーディングされたが、一文だけでは非常にわかりにくい。「だろうか〈問題提起〉」をつけた疑問文にすることで、問題提起として機能する。

以上のように学習者の誤用には「だろうか〈問題提起〉」「のではないか〈主張〉」の混同や裸の形式の疑問文の使用がみられた。これは、伊集院・高橋（2006）で「だろうか疑問文」が使えないという報告と重なる結果である。これらの知見から、意見文における疑問文の使用の指導では、問題提起には「だろうか」を、主張には「のではないか」を使うことに注意を向けさせる必要があるであろう。

7. おわりに

本研究では、中国人学習者と日本人の文末表現の使用について、母語と照らし合わせて比較検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- ① CNは文末に「思う」を多用し、このため主観的意見表明に偏っているように見られるが、本研究の結果、中国語文からは実は断定的表現を避けるために用いられていることが多いと推察された。従って客観性を持つ学術文にするためには、「思う」の多用を避け、多様な思考動詞、とりわけ客観性を装うことができる受身形（考えられる、思われるなど）の使用を指導することが必要である。
- ② CNはモダリティの中で「だろう」の使用が突出して困難である。これは「だろう」の機能が推量や確認要求、断定回避など多岐であり、母語にぴたりと当てはまる語がないことが一因であると思われる。また、日本語教育の過程で意見を表す一つの重要な表現であることを学んでいないのではないか。これは今後の作文指導の課題である。「思う」の多用を避けるためには、断定回避の「だろう」を使用する指導が重要である。
- ③ 疑問文はCNもJP同様に積極的に使おうとしている。疑問文は意見文を展開するうえで、書き手の思考を開示し読み手を巻き込もうとする機能があり、大変有効である。しかし、「だろうか疑問文」が使えないために問題提起文としては違和感がある。ここにも中国語では疑問文をそのまま問題提起として使うことができるという母語の影響が見られた。また疑問文の問題提起機能と主張機能の混同が見られる点は、学習者の更なる定着を図る必要があるであろう。

本研究では、JPとCNの文末表現の使用実態について、母語を含めて検討した。しかし、分析対象としたデータが少なく限定的であることは否めない。今後はデータ数を増やし、量的に検討する必要があるであろう。また、今

回の調査ではモダリティの持つ多様な機能を学習者がどこまで理解しているかについては検討していない。今後はレベル別に、モダリティの習熟度について検討するべきだろう。

今回は、文末モダリティについて検討したが、学習者の作文と日本語母語話者の作文の相違点はこのほかにも存在するため、より多角的に両者の作文を検討することを今後の課題としたい。

謝辞

本調査にご協力いただきました留学生の皆様には、心より御礼申し上げます。

注

- 1 本研究では、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(伊集院2011) [http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/koukai_data1.html] うち、日本語母語話者の作文の一部を分析対象としている。
- 2 傾きとは、何らかの見込みをもっているという点で中立ではないものを指す。

使用データベース

伊集院郁子 (2011) 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」

参考文献

- 伊集院郁子・高橋圭子 (2004) 「文末モダリティに見られる“Writer/Reader visibility”—中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』123, 86-85
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2012) 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的な特徴—「主張」に着目して—」『東京外国語大学国際に本研究センター日本語・日本学研究』2, 1-16
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2010) 「日本語意見文に用いられる文末モダリティ—日本・中国・韓国語話者の比較—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36, 13-27
- 大島弥生 (1993) 「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81, 93-103
- 小川泰生 (1990) 「日中対照研究—主語の省略について (本文編)」『広島大学総合科学部紀要Ⅱ・社会文化研究』15, 1-19

- 木戸光子 (2007) 「作文における「客観的表現」：上級日本語学習者の作文の分析を通して」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』22, 1-10
- 佐々木泰子・川口良 (1994) 「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84, 1-13
- 高橋圭子・伊集院郁子 (2006) 「疑問文に見られる”Writer/Reader visibility” — 中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』130, 80-89
- 日本記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
- 二通信子 (1996) 「レポート指導に関するアンケート調査の報告」『学園論集』86・87, 63-78
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2009) 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎 (1995) 「ト思ウ, ハズダ, ニチガイナイ, ダロウ, 副詞～φ—不確実だが高い確信があることの表現—」『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版